

**青年国際交流事業の効果検証に関する検討会
報告書**

平成27年7月

目次

I. 平成26年度グローバルユースリーダー育成事業	
「シップ・フォー・ワールド・ユース・リーダーズ」の評価	1
II. 内閣府青年国際交流事業の効果測定の方角性	13
III. 今後の内閣府青年国際交流事業のあり方に関する意見の整理	19

(参考)

青年国際交流事業の効果検証に関する検討会 構成員	22
青年国際交流事業の効果検証に関する検討会 検討経緯	23

(参考資料)

資料1 平成26年度内閣府青年国際交流事業の概要	24
資料2 平成26年度グローバルユースリーダー育成事業	
「シップ・フォー・ワールド・ユース・リーダーズ」の概要	25
資料3 総括評価（事業報告書より抜粋）	27
資料4 参加青年アンケート結果（事業報告書より抜粋）	33
資料5 事業前～事業後の自己評価結果	50
資料6 在外公館アンケート結果	53

I. 平成26年度グローバルユースリーダー育成事業 「シップ・フォー・ワールド・ユース・リーダーズ」の評価

平成26年度内閣府青年国際交流事業の効果を検証するに当たり、複数実施された事業の中から「グローバルユースリーダー育成事業「シップ・フォー・ワールド・ユース・リーダーズ」を特に取り上げて、事業の成果を集中的に検証することとした。本事業は近年集中的な見直しを行ってきた「世界青年の船」の成果を引き継ぐ事業であり、①次世代のグローバルリーダーとしての青年の成長、②各国との関係強化及び我が国への理解・関心の向上、③国境を越えた人的ネットワークの構築と社会貢献活動の促進を目的としている。

本事業については、平成27年度からは「次世代グローバルリーダー事業「シップ・フォー・ワールド・ユース・リーダーズ」」として形態を変えてより長い船上研修を実施することが予定されており、現段階においていったん事業の評価を整理し、新たな事業の効果的な実施に資する必要がある。

事業終了から約3か月後の現時点においては、事業中～終了直後に行った効果測定に基づく評価を行ったところ。今後、事業終了から約1年後に行うフォローアップ及び事業終了から数年後を目途として行う中長期のフォローアップの実施を予定している。

【事業の概要】

事業名：グローバルユースリーダー育成事業「シップ・フォー・ワールド・ユース・リーダーズ」

実施期間：

陸上研修 平成27年1月26日～2月1日（7日間）

船上研修 平成27年2月2日～2月13日（12日間）

途中、那覇（沖縄県）及び大船渡／陸前高田（岩手県）の2か所に寄港

海外研修 平成27年2月14日～2月21日（8日間） ※ 日本青年のみ

参加青年：

日本青年 108名 外国青年 96名 合計 204名

外国青年の参加国 バーレーン、ブラジル、インド、ケニア、ニュージーランド、オマーン、ペルー、スリランカ、トルコ、英国

【事業の評価】

①参加青年の成長

・グローバルリーダーに必要とされる諸能力の向上度合いに関する参加青年自身の評価（1）

参加青年に対し、「コミュニケーション力」「リーダーシップ」「問題解決能力」「異文化対応力」「率先性、積極性」「自信」「計画力」「ディスカッション能力」「チャレンジ精神」「準備能力」「異文化適応力」「マネジメント力」の12項目について、本プログラムがそれぞれの向上に役立つと思うかどうか（5段階評価）を事業後に質問した。

全ての項目について「5 非常にそう思う」「4 そう思う」の合計が50%を超えており、とりわけ「異文化対応力」「異文化適応力」については80%以上、「コミュニケーション力」「率先性、積極性」「自信」「チャレンジ精神」については70%以上の高い数値を示した。

また、24年度・25年度事業に比べて、ほぼ全ての項目において参加青年自身による評価結果は向上している。その中でも「コミュニケーション力」「率先性、積極性」については10ポイント以上の高い伸びを示した。

		5 (非常にそう思う)	4 (そう思う)	5と4の合計	平均点
コミュニケーション力	26年度	35.8%	41.7%	77.5%	4.1
	25年度	32.3%	33.5%	65.8%	3.9
	24年度	21.8%	39.3%	61.1%	3.7
リーダーシップ	26年度	30.9%	35.8%	66.7%	3.8
	25年度	24.1%	41.8%	65.9%	3.7
	24年度	15.6%	33.2%	48.8%	3.5
問題解決能力	26年度	16.2%	38.7%	54.9%	3.5
	25年度	13.9%	33.5%	47.4%	3.4
	24年度	10.4%	33.2%	43.6%	3.4
異文化対応力	26年度	58.8%	29.9%	88.7%	4.4
	25年度	46.8%	37.3%	84.1%	4.2
	24年度	37.0%	43.1%	80.1%	4.1
率先力、積極性	26年度	35.8%	40.7%	76.5%	4.0
	25年度	24.7%	36.1%	60.8%	3.6
	24年度	19.9%	40.8%	60.7%	3.7
自信	26年度	34.8%	39.7%	74.5%	4.0
	25年度	27.8%	39.2%	67.0%	3.8
	24年度	-	-	-	-
計画力	26年度	18.1%	39.7%	57.8%	3.6
	25年度	22.8%	33.5%	56.3%	3.6
	24年度	-	-	-	-
ディスカッション能力	26年度	27.9%	35.8%	63.7%	3.8
	25年度	25.3%	39.9%	65.2%	3.8
	24年度	15.6%	36.5%	52.1%	3.5
チャレンジ精神	26年度	43.6%	28.9%	72.5%	4.0
	25年度	32.3%	34.8%	67.1%	3.9
	24年度	-	-	-	-
準備能力	26年度	22.5%	36.8%	59.3%	3.7
	25年度	19.0%	33.5%	52.5%	3.6
	24年度	-	-	-	-
異文化適応力	26年度	62.3%	23.5%	85.8%	4.4
	25年度	43.7%	40.5%	84.2%	4.2
	24年度	-	-	-	-
マネジメント力	26年度	21.6%	40.2%	61.8%	3.7
	25年度	20.9%	34.8%	55.7%	3.6
	24年度	-	-	-	-

・グローバルリーダーに必要とされる諸能力の向上度合いに関する参加青年自身の評価（２）

また、事前研修時（日本青年のみ）・陸上研修前（全参加青年）・船上研修後（全参加青年）・海外研修後（日本青年のみ）の４回に分けて、「コミュニケーション力」「リーダーシップ」「問題解決能力」「異文化対応力」「主体性、積極性」「自信」「企画力」「積極的な発言」「チャレンジ精神」「計画性」の１０項目について、自身が６段階評価（「十分備えている」～「まったく備えていない」）でどの位置にあるかを質問した。

日本青年は、外国青年に比べて全体的に自己評価が低い傾向にあるが、陸上研修前と船上研修後を比較すると、外国青年に比べて伸びが大きく、さらに海外研修を経ることで数値が上がっている。また、事前研修時と陸上研修前を比べると半分以上の項目で数値が下がっている。これは、日本青年が研修の準備を進めるうちに、他の日本青年と自分を比べて自信を失ってしまうことが原因ではないかと考えられる。

各項目の中では、「異文化対応力」「自信」については１．０ポイント以上、「問題解決能力」「企画力」については０．８ポイント以上と特に大きな伸びがみられた。

		①事前 研修時	②陸上 研修前	③船上 研修後	④海外 研修後	②～③ 伸び	①～④ 伸び
コミュニケーション力	全参加青年	-	4.50	4.98	-	0.47	-
	日本青年	4.33	3.87	4.59	4.92	0.72	0.59
	外国青年	-	5.20	5.42	-	0.22	-
リーダーシップ	全参加青年	-	4.08	4.68	-	0.58	-
	日本青年	3.74	3.36	4.24	4.40	0.88	0.65
	外国青年	-	4.91	5.18	-	0.27	-
問題解決能力	全参加青年	-	4.36	4.83	-	0.46	-
	日本青年	3.91	3.81	4.47	4.70	0.67	0.80
	外国青年	-	4.99	5.24	-	0.25	-
異文化対応能力	全参加青年	-	4.75	5.37	-	0.60	-
	日本青年	4.34	4.31	5.19	5.41	0.88	1.05
	外国青年	-	5.25	5.57	-	0.32	-
主体性・積極性	全参加青年	-	4.49	4.96	-	0.45	-
	日本青年	4.16	3.83	4.53	4.76	0.70	0.61
	外国青年	-	5.23	5.44	-	0.21	-
自信	全参加青年	-	4.25	4.80	-	0.52	-
	日本青年	3.51	3.44	4.39	4.72	0.95	1.21
	外国青年	-	5.17	5.26	-	0.09	-
企画力	全参加青年	-	4.31	4.80	-	0.49	-
	日本青年	3.58	3.70	4.35	4.55	0.65	0.96
	外国青年	-	4.99	5.32	-	0.33	-
積極的な発言	全参加青年	-	4.02	4.63	-	0.60	-
	日本青年	3.71	3.16	4.06	4.42	0.90	0.70
	外国青年	-	4.99	5.28	-	0.29	-

チャレンジ 精神	全参加青年	-	4.79	5.19	-	0.40	-
	日本青年	4.44	4.39	4.87	5.05	0.48	0.62
	外国青年	-	5.23	5.55	-	0.32	-
計画性	全参加青年	-	4.20	4.79	-	0.57	-
	日本青年	3.89	3.57	4.45	4.60	0.88	0.73
	外国青年	-	4.91	5.17	-	0.26	-

・異文化感受性発達調査（IDI）の実施結果

有識者の協力を得て、異文化感受性発達モデルに基づく「異文化感受性発達調査」（Intercultural Development Inventory）を参加青年のうち「異文化理解」「情報・メディア」コースの38名に対して実施した。その平均値は下表のとおり。

今回の調査においては、参加青年の違いを受容し、適合しようという態度に問題はなかったものの、異文化感受性に大きな変化はみられなかった。これは、短い事業期間で様々な活動を共同で実施する中で、参加青年が基本的には違いを楽しみながらも、無意識のうちに衝突を避けて自分と似た価値観の青年と一緒に過ごしてしまったのではないかと考えられる。

	事業前	事業後	変化
異文化感受性（145ポイント中）			
認知度	120.60	120.60	±0
発達度	87.84	87.35	-0.49
世界観プロフィール（5ポイント中）			
違いの否定	3.7	3.88	+0.18
転換	3.5	3.41	-0.09
違いの最小化	2.96	2.65	-0.31
違いの受容、適合	3.65	3.86	+0.21

・研修アドバイザー、研修講師等からの評価

実際に参加青年と寝食を共にしながら事業の運営に携わり、日常的に青年たちの成長を観察することができる立場にあった者からの定性的な評価を得た。その中でも特徴的なコメントを抜粋したものは以下のとおり。

－ 管理官（事業全体の管理運営責任者）

一つの集団で行動していると、リーダーとフォロワーが得てして固定してしまいがちになりますが、期間中に様々な活動が並行して行われることで、様々な場面で異なる青年たちがリーダー的な役割を果たしている 場面を度々見かけることができました。【事業報告書より】

－ 研修アドバイザー（コース・ディスカッション等研修全体の企画・実施者）

海外研修については、どのコースもチームとしてのまとまりができ、自分のコースが一番であると自負しているところが印象的であった。日々の振り返りを積み重ねることにより各人の気づきが共有され、コースとしての一体感が醸成されてきたものと思われる。安心してグループの中で自己表現できるようになり、積極的にリーダーシップをと

れるようになり、以前の自分とは違う自分になったという青年の言葉に研修の一つの成果を感じた。

サマリー・フォーラム、帰国後研修における海外研修発表会における報告・発表は、今回の事業が与えられた条件をいかして、最善に近い成果をもたらしたことを裏付けている。一方で陸上研修、船上研修、海外研修というある種慌ただしいものだったため、距離的に遠方に位置するペルーへの派遣団はかなり無理を強いられる内容となっていた。

【事業報告書より】

－ 研修講師（リーダーシップに関する研修講師）

最初は半信半疑のような表情で聞いていた参加青年たちも、後半の信念についてワークする段になるとかなり盛り上がってきて、最後は非常に高いエネルギー状態で終わることができた。特に共感と呼んだのは、「すべての人がリーダーである」ということ、そしてリーダーをリーダーたらしめるのは信念や志であり、それは誰の中にもあるという考え方であった。リーダーシップというと、特定の立場の人しか発揮できないもの、あるいは特定の人しか備わっていない資質や才能というふうにとらえている場合が多かった参加青年たちにとってこの考え方は新鮮だったようで、自分たちにもその気になればリーダーシップを発揮できる可能性があることを知って少なからず自信と希望を得た様子であった。【事業報告書より】

1か月の研修中に、参加青年は (1)陸上研修当初、期待と不安の入り混じった状態(2)船上研修に移ってからのカルチャーショック状態(3)ナショナルプレゼンテーション等の活動を経た達成感を得た上で、船上研修も残り短いのでとにかくやってみようという開き直りの状態(4)海外研修を経て、地に足を着けて事業が終わった後のことを考える段階というフェーズを通過して成長するように思う。ただし、個人差があることに留意し、この(2)から(3)、(3)から(4)の移行をスムーズにできるようサポートすることが大事ではないか。

また、参加青年が事業中に得る重要なものとして、世界のスタンダードの中で自分にはどのような強みがあり、課題があるかという「自己認識」と自分が今生きている世界、社会はどうなっているかという「社会認識」の両面の高まりがある。この高まりを前提として実質的な成長につながるかどうかは、本人の努力と事後活動を含めた継続的なフォローが重要。【第2回会議のヒアリングより】

②各国との関係強化及び我が国への理解・関心の向上

・相互理解や日本への印象の変化に関する参加青年自身の評価

参加青年に対し、「自分と日本の人々との相互理解」「自分と他国の人々との相互理解」「自分と他国の人々との友好関係構築」について、本プログラムがそれぞれの向上に役立つと思うかどうか（5段階評価）を事業後に質問した。また、日本に対する印象が本プログラムへの参加でどのように変わったか（5段階評価）についても質問した。

全ての項目について全参加青年の平均で「5 非常にそう思う」「4 そう思う」の合計が80%を超える高い数値を示した。特に相互理解の促進や我が国への理解・関心の向上の観点から重要と考えられる項目について、日本青年・外国青年別に経年変化をとった表を以下に示す。

相互理解の促進については、過去の事業においても日本青年・外国青年ともに高い水準にあったが、引き続き本事業においても90%を上回る青年から本事業は相互理解の促進に役立つ

との回答を得ることができた。

日本に対する印象の変化について、1 か月超の船上研修と外国寄港を行った 23 年度が 90% 以上という高い数値であり、その後、より短期間の船上研修と国内寄港を行った 24 年度、25 年度はそれから 10 ポイント以上下がる結果となったが、同じくより短期間の船上研修と国内寄港を行った 26 年度は 23 年度を上回る高い数値となった。これは、3 年間の国内寄港事業を実施する中で、被災地の視察など特に外国青年の満足度の高いプログラムをより効果的に組み込むことができるようになった結果と考えられる。

- このプログラムは、あなたと日本の人々との相互理解に役立つと思うか（外国青年）

	26 年度	25 年度	24 年度	23 年度
5（非常にそう思う）	78.1%	64.8%	57.9%	75.8%
4（そう思う）	18.8%	32.4%	36.8%	18.0%
5と4の合計	96.9%	97.2%	94.7%	93.8%

- このプログラムは、あなたと他国の人々との相互理解に役立つと思うか（日本青年）

	26 年度	25 年度	24 年度	23 年度
5（非常にそう思う）	62.0%	63.2%	33.6%	66.7%
4（そう思う）	30.6%	31.0%	44.0%	24.8%
5と4の合計	92.6%	94.2%	77.6%	91.5%

- 日本に対する印象は、プログラムへの参加でどのように変わったか（外国青年）

	26 年度	25 年度	24 年度	23 年度
5（とても良くなった）	66.7%	59.2%	34.7%	47.7%
4（良くなった）	26.0%	22.5%	38.9%	43.8%
5と4の合計	92.7%	81.7%	73.6%	91.5%

・各国ナショナル・デリゲーション・リーダーからの評価

外国青年の国ごとの代表として参加した各国ナショナル・デリゲーション・リーダーから、本事業が各国青年の成長や我が国との友好促進についてどのような役割を果たしたか、定性的な評価を得た。その中でも特徴的なコメントを抜粋したものは以下のとおり。

- ブラジル

ホームステイはこの事業のハイライトの一つだと思います。ほかには類を見ない文化交流であり、参加青年が日本文化に深く入り込むことができる機会です。国境と時間を超えた友情の絆も深めてくれます。短い日程（二泊と中一日）でも成果は大きいのですが、少なくとも丸二日間以上にすることで、更にすばらしい成果が得られると確信しています。

- インド

“Vasudeva Kutumbakm” とは「世界は家族のように一つになる」という意味のサンスクリット語ですが、「シップ・フォー・ワールド・ユース・リーダーズ」はまさにその成功事例です。セミナー、リーダーシップ活動、自主活動、自己啓発コース、異文化理解、国際的な絆、完璧な時間管理など、世界でも例を見ないプログラムです。

この事業は、参加青年の人格形成を助け、それぞれの人生に様々な興味深い事実を付け加えてくれます。

- ニュージーランド

(提案として)

- ・各国参加青年が親交を深め、個人的に情熱を持っている関心についてディスカッションするために、夜の自由時間を増やすと良いでしょう。
- ・船上で二週間過ごしてようやく互いを深く知り、打ち解け始めることができました。1～2週間、船上での時間を増やせば効果的でしょう。

- ペルー

寄港地活動が本事業の要の一つであることは間違いありません。沖縄県那覇市と岩手県大船渡市・陸前高田市を訪問し、日本の様々な文化の全体像をつかむことができました。

陸前高田市の訪問では、2011年の大震災と津波の影響への理解を深めることができました。被災地を訪れ、復興の証人となったことは、ローカルユースとの対話や課題別視察と同様に、私たちの目を開かせてくれ、また謙虚な気持ちにさせてくれました。この訪問を通じて、自国の現実を振り返ることができました。

- スリランカ

本事業の優れた点は、寄港地活動委員会、リーダーシップ・セミナー委員会、PYセミナー委員会など様々な委員会があることです。これらは青年がリーダーシップを発揮し、リーダーシップ・スキルとチームワークを高めるためのすばらしい機会です。国籍が様々なある私たちが一つのチームとして団結し、協力し合えることを知り、感動しました。

・ 在外公館、参加国政府からの事業に対する評価

事業終了後、在外公館及び参加国政府に対してアンケートを実施し、主に外交的観点からの事業の有用性等に関する評価を把握した。在外公館に対して「参加外国青年の日本に対する関心・理解の向上」「相手国と日本との関係強化」の観点からそれぞれ事業が有意義かどうか(5段階評価)を質問したところ、グローバルユースリーダー育成事業については、回答した全ての在外公館が「5 非常に有用」「4 有用」と回答しており、本事業が高い評価を受けていることがわかった。

また、相手国政府に対し、本事業が相手国と日本との友好関係の促進に貢献していると思うか(5段階評価)を質問したところ、本事業については同じく回答した全ての政府が「5 非常に有用」「4 有用」と回答しており、政府側からも高い評価を受けることができた。

- (在外公館に対しての質問) この事業は、招へいされた外国青年の日本に対する関心・理解の向上にとって有意義だと思うか。

	グローバルユースリーダー 育成事業のみ	全事業合計
5 (非常に有用)	5 か国	18 か国
4 (有用)	5 か国	7 か国
3 (どちらとも言えない)	なし	なし

- (在外公館に対しての質問) この事業は、相手国と日本との関係強化という観点からみて、有用なツールだと判断するか。

	グローバルユースリーダー 育成事業のみ	全事業合計
5 (非常に有用)	6 か国	17 か国
4 (有用)	4 か国	8 か国
3 (どちらとも言えない)	なし	なし

- (各国政府に対しての質問) この事業は、相手国と日本との友好関係の促進に貢献していると思うか。

	グローバルユースリーダー 育成事業のみ	全事業合計
5 (非常に有用)	8 か国	18 か国
4 (有用)	2 か国	3 か国
3 (どちらとも言えない)	なし	1 か国

・訪問国での事業の報道振り

現地メディアでの事業紹介は、当該国の国民一般の我が国への関心を高めることができる重要なツールであり、本事業においてもテレビ・新聞等のマス媒体で取り上げられることで一定の関心喚起を行えたにとらえることができる。

他方、航空機での訪問は船の寄港に比べてニュースバリューが低いことに留意する必要がある。例えば、外国寄港を行った 23 年度事業においてはインド・スリランカの現地複数紙において事業に関する記事が第 1 面に掲載された。

本事業の日本青年の海外研修における訪問国での具体的な報道振りは以下のとおり。

- バーレーン：現地新聞での記事掲載
- ニュージーランド：青年担当大臣によるプレスリリースの発行
- ペルー：現地新聞での記事掲載
- スリランカ：複数のテレビ局及びラジオ局でニュースとして紹介
- トルコ：国営テレビでニュースとして紹介

・訪問国政府の対応振り

相手国政府の首脳級、閣僚級の要人への表敬は、相手国政府が本事業を重要視していることを示す一つの指標であると同時に、政府要人に対して直接、我が国を印象付け、関心を高めることができる貴重な機会である。

本事業の日本青年の海外研修において実現した表敬訪問等は以下のとおり。

- ニュージーランド：首相・青年担当大臣への表敬訪問及び同大臣主催レセプション
- スリランカ：青年担当大臣への表敬訪問
- トルコ：首相・青年スポーツ大臣への表敬訪問

③人的ネットワークの構築と社会貢献活動の促進

・人的ネットワークの広がりに関する参加青年自身の評価

参加青年に対し、本プログラムからどのようなことを得たかを複数選択式で質問した。そのうち「多くの友人を得ることができた」と回答した参加青年は 161 名（日本青年 89 名、外国青年 72 名）であり、回答者の 78.9%に達した。

・事業の成果を地域や国に還元していく意欲に関する参加青年自身の評価（1）

参加青年に対し、本プログラムを通して社会貢献活動に参加したいという意欲を持ったかどうか（5段階評価）を事業後に質問した。「5 非常にそう思う」「4 そう思う」の合計が 90%を超え、ほとんどの参加青年が強い社会貢献意欲を示した。

また、26 年度事業は過去 3 回の事業と比較してもより高い数値を示しており、参加青年の社会貢献意欲を高め、事業の成果を参加青年本人が得るだけでなく、地域や国、国際社会に還元していくという事業の趣旨をより高い程度で達成しているととらえることができる。

また、具体的にどのように事業の成果を活用していくか、どのような事後活動を計画しているかについて記述式により質問したところ、多くの参加青年から具体的な回答があり、事業終了直後の段階においても、今後の社会貢献について、具体的な内容まで考え、実践しようとしていることがわかった。

－ 事業参加を通じて、社会貢献活動に参加したいという意欲をもったか。

	26 年度	25 年度	24 年度	23 年度
5（非常にそう思う）	55.9%	42.4%	45.0%	62.3%
4（そう思う）	35.8%	48.1%	42.7%	24.1%
5と4の合計	91.7%	90.5%	87.7%	86.4%
平均点	4.5	4.3	4.3	4.5

－ 本事業への参加を通して得た体験やネットワークを将来いかに活用しようと思うか。また、どのような事後活動をしようと考えているか。（抜粋）

（日本青年）開発の仕事ができるインターンシップ・プログラムへの参加と、IYEOを通じて日本社会に貢献することを計画している。

（日本青年）福島にある 2011 年の災害で両親を亡くした子供のための養護施設で、子供たちに世界について教えたい。夢に向かって進み、国際的な環境に対して積極的になる後押しができるようになりたい。

（日本青年）記者になるので、今後、個人的なつながりを最大限に活用したい。私たちのレター・グループでは 1 年に一度「G グループの日」を設定し、事業の後も何らかの社会貢献を実行することを決めた。

（ブラジル青年）ブラジルでイスラム教徒に対する理解を広める活動を行おうと計画している。さらに、日本で教育・政治問題に取り組む決意を固めた。日本で英語教師となることを予定している。

（インド青年）貧しい人々に無償の教育を与える NGO を立ち上げたい。「Teach for Japan」から学んだように、持続可能な開発のための教育に必要な活動の場の基礎作りに役立つだろう。

(ケニア青年)(井戸を掘る形で)地元の農村地域に給水所を設けることを考えており、そのための助言や指示を得られるようネットワークを活用したい。

・事業の成果を地域や国に還元していく意欲に関する参加青年自身の評価(2)

また、事前研修時(日本青年のみ)・陸上研修前(全参加青年)・船上研修後(全参加青年)・海外研修後(日本青年のみ)の4回に分けて、「海外への留学」「海外での勤務」「国際的な仕事や仕事以外の活動(ボランティア等)」「地域に貢献する仕事や仕事以外の活動(ボランティア等)」「仕事や仕事以外でのリーダーシップの発揮」「英語等の語学力の向上」「日本についての理解」の7項目について、それぞれ今後の意欲を6段階評価で質問した。

元々の数値が平均で5(6段階評価の上から2番目)程度と比較的高かったため、全体に伸びは大きくないが、「地域に貢献する仕事や仕事以外の活動(ボランティア等)」「仕事や仕事以外でのリーダーシップの発揮」の2項目について日本青年には0.5ポイント以上の伸びがみられた。本事業に参加を志望する青年は、国際的な活躍を希望する者が多いため地域に密着した仕事についてはどちらかといえば関心が低い傾向にあるが、事業を通じて、様々なキャリアや自己実現のあり方を学び、地域での活躍についても魅力を感じるようになったものと思われる。

		①事前 研修時	②陸上 研修前	③船上 研修後	④海外 研修後	②～③ 伸び	①～④ 伸び
海外への 留学	全参加青年	-	5.34	5.42	-	0.08	-
	日本青年	5.21	5.19	5.37	5.52	0.18	0.31
	外国青年	-	5.51	5.47	-	△0.03	-
海外での 勤務	全参加青年	-	4.93	5.16	-	0.22	-
	日本青年	5.04	4.88	5.08	5.28	0.20	0.24
	外国青年	-	4.98	5.24	-	0.23	-
国際的な仕事 やボランティア	全参加青年	-	5.26	5.50	-	0.23	-
	日本青年	5.34	5.01	5.30	5.47	0.28	0.13
	外国青年	-	5.54	5.72	-	0.18	-
地域に貢献す る仕事やボラ ンティア	全参加青年	-	5.44	5.68	-	0.24	-
	日本青年	4.81	5.15	5.58	5.58	0.43	0.78
	外国青年	-	5.76	5.79	-	0.03	-
リーダーシップ の発揮	全参加青年	-	5.38	5.60	-	0.22	-
	日本青年	4.96	5.09	5.43	5.46	0.34	0.50
	外国青年	-	5.71	5.79	-	0.09	-
語学力の 向上	全参加青年	-	5.69	5.82	-	0.12	-
	日本青年	5.86	5.62	5.81	5.81	0.19	△0.05
	外国青年	-	5.77	5.82	-	0.04	-
日本について の理解	全参加青年	-	5.65	5.68	-	0.03	-
	日本青年	5.69	5.46	5.57	5.64	0.11	△0.06
	外国青年	-	5.85	5.80	-	△0.05	-

【参考】自己評価において+3以上の伸びを記録した日本参加青年の個人レポートより、事業で体験した自分が変わるきっかけとなった具体的なエピソードを抜粋して以下に取りまとめた。

「異文化対応力」+4となった参加青年

- 日本での日常生活では、どん底に陥るような経験はほとんどなく、ある程度自分に自信を持っていたが、事業が始まるとディスカッション内容が理解できない、グループ内で問題が起きると感じて何かが問題か理解できない等、日本では何でもないはずの場面でアクションを起こせない自分が非常に不甲斐なく感じ、自信を持たず、主体性も積極性も全く持てなかった。ナショナルリーダーたちが手を差し伸べてくれて、ディスカッションで発言を促し、「失敗は恥ずかしいことではない」「素直に、正直にすることが、自分を理解してもらうために必要なこと」「自分の弱みばかり見ないで自分の強みを最大限に伸ばせ」といった聞けば当たり前のことを改めて体得させてくれた。

「問題解決能力」+3となった参加青年

- 選考試験で英語の出来が悪く、事前研修におけるディスカッションでも全く英語を話すことができなかった。そのためリーダーシップ・セミナーのコース・ディスカッションの発表でも「英語を話すことが出来ないし、自信がない」と発表を拒否したが、仲間たちが「70%でパーフェクト、いいからやってみろ」と後押ししてくれたので、発表することにした。全員が理解できるようゆっくり話すよう心掛け、みんなに発表を褒めてもらえた。
事業中の経験や学びを活かして、今参加している復興ボランティアでも積極的に前に出るよう、がんばりたい。迷うよりもまず行動に移すことを重視したい。
- 震災と防災についてのPYセミナーを実施する予定だったが、メンバーがまとまらずセミナーを実施できなくなりそうだった。まず自分から行動することが大事と考え、友人と二人でスライドや資料を準備し、メンバーに見せたところ、他のメンバーも次第に協力してくれるようになり、結果的にPYセミナーは大成功となった。途中であきらめることなく行動したことで一人もメンバーが欠けることなくセミナーを終えることができたのが何よりうれしかった。この過程を含め、事業中にリーダーシップを発揮する機会には、「全員が楽しくディスカッションや作業に参加できていること」を無意識に気を付けていた。事業を通じて、全員が積極的に参加できる雰囲気を作り、リーダーである自分もみんなから力を借りて、全員で進んでいくという自分流のリーダーシップを発見することができた。
- 事業ではPYセミナー委員会の委員長となった。多くの参加青年からPYセミナー発表の希望があり、絞り込みに非常に苦戦した。また委員会のメンバーをどのようにまとめて仕事を回していけばいいのか日々悩んでいた。ある外国青年から「もっと自信を持つことに自信を持って。君は自分で考えているよりも自信を持っているのに気付いていないだけだよ」と言葉を掛けられて、自分の頑張りや決して無意味なものではなく、委員会のメンバーみんなが自分のやり方についてきてくれ、いつも支えてくれている、見てくれているということに気が付いた。こうした経験を経て、自分の知らなかった部分や成長しなければならぬ部分を認識するとともに、友人の大切

さに気付くことが出来た。

- 事業を通じて、「support」とは例えばプレゼンテーションをするときに出来る人が出来ない人の代わりにやることではなく、お互いの長所を最大限発揮することができ、お互いが輝いている瞬間を生み出すことだと気が付いた。アイデアはたくさんあるが英語で表現できない人、アイデアはないが英語はとても堪能な人、どちらも苦手だがパソコンは得意な人、アイデアが浮かばず英語もパソコンも苦手だが客観的に物事を見て判断できる人、全部不得意だが皆の意見を素直に聞ける人、様々な異なった思考を持つ人間がこんなにもいるのか、と改めて実感した。一人でいるとただの短所に感じてしまう所が、団体になると皆一人ひとりの最高の長所に変身することが出来る。

「企画力」+3となった参加青年

- コース・ディスカッションで学んだことを発表するサマリー・フォーラムのために、発表内容をまず全員で討議した。何に重点を置くか、誰がどういった手法で発表するのが効果的か、様々な意見が飛び交った。自分にとっては発表の本筋とは関係がないと思える意見も多く、議論が迷走しているように見えた。自分が正しいと思っていた議論の進め方や発表の内容とはかけ離れており、議論の着地点の予想は全くつかなかった。しかし、発表自体は、当初自分が想定していたものとは異なったが、素晴らしいものになった。発表の内容や手法もこれまで実践したことがないもので、非常に学びが多かった。この経験から、ゴールに達する道は一つではなく無数にあること、多様性のある環境では様々な意見が飛び交い、当人たちが予想していなかった新しい考えが生まれることを学んだ。今後、地域や職場といった様々なコミュニティでリーダーシップを発揮していくために、多様性を尊重し、その力を最大限引き出す力を身に付けていきたい。

「積極的な発言」+3となった参加青年

- 事前研修で自分の実力のなさを思い知り、悔しい思いや辛い思いをたくさん経験した。参加者のポテンシャルが非常に高く、自分とは何か、自分は何ができるのか、嫌というほど考えさせられ、事業を通して成長するしかない、やれることは何でもやろうと心に決めて事業に臨んだ。PYセミナーに挑戦し、英語も人前で話すことも不安しかなかったが、他のメンバーのサポートのおかげで無事成功させられた。外国青年の前で英語でプレゼンしたことが自信になり、やり遂げた達成感は忘れられないものとなった。

Ⅱ．内閣府青年国際交流事業の効果測定の方角性

Ⅰ．平成26年度グローバルユースリーダー育成事業「シップ・フォー・ワールド・ユース・リーダーズ」の評価に基づき、今後の内閣府青年国際交流事業の効果測定のあるべき方角性について以下のとおり検討を行った。本年度以降は、各事業の趣旨・性格を踏まえつつ、基本的にこの考え方に沿って効果測定を行い、PDCAを進めるべきである。

とりわけ、平成27年度からは同事業に代えて、1か月超の船上研修と外国への寄港を行う「次世代グローバルリーダー事業「シップ・フォー・ワールド・ユース・リーダーズ」」の実施を予定しており、事業の内容・形態の変更がどのような影響を与えるか観察していく必要がある。

【効果測定に当たっての基本的な考え方】

- 事業の目的（①参加青年の成長、②各国との関係強化及び我が国への理解・関心の向上、③人的ネットワークの構築と社会貢献活動の促進）に即した効果測定を行う。
- 事業の効果が事業終了から長期にわたって発現する国際交流事業の特徴にかんがみ、単年度で行う効果測定と中長期で行う効果測定の両方を実施する。そのうち単年度で行うものについては、事業中～終了直後に実施するものと事業終了から約1年後にフォローアップとして実施するものとに分けて行う。
- 事業中に実施する効果測定については、プログラム内容に即したものとする。例えば、長期の船上研修を行う場合、事業における青年の成長が幾つかの段階を経て進むことを踏まえ、船上研修前と後だけではなく、途中においても実施することが望ましい。また、その段階の移行をよりスムーズに行えるよう支援する観点から、ピア・フィードバック（青年同士が互いの強みや課題を話し合い、成長を確認するプロセス）の導入を検討するべきである。
- 事業全体としての評価に加えて、参加青年の個人としての成長度合いを組み込むことが望ましい。この観点から、参加青年が事業の趣旨を適切に理解できるよう十分な説明を行った上で、事業当初に設定する個人目標をそれぞれ達成できたか否かの総計を一つの指標としてはどうか。ただし、個人目標については、事業が進むにつれて自身の弱点・課題の把握が深まると考えられることから、事業途中で変わることも想定すべきである。
- 自己評価に基づく定量的な成長度合いの大きかった青年については、グッド・プラクティスとしてどのような青年がどのような成長を遂げたかについて記述することを検討するべきである。
- 事業中に実施するアンケート等については、いわゆる「評価疲れ」が起きないように、評価項目を厳選するなど、短時間の間に青年が記入できるものとするべきである。

- 経年変化を観察することは重要との観点から、従来実施していたアンケートについても項目の絞り込み等を検討しつつ引き続き実施し、事業プログラムの変化が事業効果に与える影響を分析し、プログラムの改善に資することとする。この際、毎年度新たな青年が参加するという事業の性格上、一定の目標値を達成したかどうかに着目することが重要である。
- 可能な限り定量的評価を行うこととするが、事業の目的はいずれも単純に数値化が困難なものであり、事業に関わった研修講師等からのコメント等、定性的評価についても重視する。
- 事業の目的の①参加青年の成長については、次世代グローバルリーダーに必要な能力はどういったものか、その中でも本事業が特に能力の伸長に効果的と考えられるものはどういったものか、といった観点から測定の対象とする項目を検討すべきである。また、青年の成長における重要なプロセスである自己認識の深まりについて、どのような指標で捉えることができるか、具体的な事象を指標として設定することを含め、更に検討を続ける必要がある。
- 事業後に実施する効果測定（事業から1年後及び中長期のフォローアップ）においては、事業前、事業中または事業終了直後に参加青年個人が立てた目標や問題意識を本人が把握できるような仕組みを検討し、内省と更なる成長のための自助努力を促すことが望ましいのではないかと。

【具体的な効果測定方法】

（1）事業中～終了直後に実施する効果測定

①参加青年の成長

- ・ 参加青年によるグローバルリーダーに必要とされる諸能力の向上度合いの評価
 （例）コミュニケーション力／異文化対応力／チャレンジ精神／問題解決能力
 ／企画力／マネジメント力 等に関する自己評価
 - 事業がその能力の向上に役立つと思うか
 - 事業前・途中・後において自分がその能力をどの程度備えているか
- ・ 参加青年自身が設定する事業における目標とその達成度合いの評価
 事前研修において本事業の趣旨について理解をした上で、参加青年自らが本事業において達成したいという目標を立てる。その目標を達成できたかどうかを事後研修において自己評価し、その結果を取りまとめる。なお、事業中に目標の変更を行ってもさしつかえないこととする。
- ・ 異文化感受性発達調査（IDI）
 「異文化感受性発達モデル」に基づく「異文化感受性発達調査」（Intercultural Development Inventory）により、参加青年の事業前・事業後の異文化対応力について一定程度客観的な測定を行う。

- ・研修講師等、参加青年の成長を観察できる立場にある者からの評価
事業全体についてのみならず、リーダーシップ、主体性・積極性、チャレンジ精神等、各項目ごとに分けて評価を行い、主観的評価では判断し難い能力の成長を分析することを旨とする。

②各国との関係強化及び我が国への理解・関心の向上

- ・参加青年による相互理解や日本への印象に関する評価
(例) (外国青年に対し) プログラムは、自身と日本人々との相互理解の点で役立つと思うか
(外国青年に対し) 日本に対する印象は、このプログラムに参加したことでどのように変わったか
(日本青年に対し) プログラムは、自身と他国の人々との相互理解の点で役立つと思うか
- ・在外公館、参加国政府からの事業に対する評価
(例) この事業は、相手国と日本の関係強化という観点からみて、有用なツールだと判断するか
この事業は、招へいされた外国青年の日本に対する理解・関心の向上にとって有意義だと思うか
- ・訪問国での事業の報道振り
(例) テレビ、ラジオ、新聞、雑誌等の媒体でどの程度報道されたか
- ・訪問国での対応振り
(例) 首脳級、閣僚級等への表敬訪問を実現できたか

③人的ネットワークの構築と社会貢献活動の促進

- ・参加青年による人的ネットワークの広がりの評価
(例) 事業を通じて何人程度の外国青年等とのつながりを得たか
- ・参加青年の事業の成果を地域や国に還元していく意欲の有無
(例) 事業参加を通じて、社会貢献活動(地域貢献活動/国際貢献活動)に参加したいという意欲を持ったか

(2) 事業終了から約1年後に実施するフォローアップ効果測定<日本青年のみ>

①参加青年の成長

- ・事業における、グローバルリーダーに必要と考えられる諸能力の向上に必要と考えられ

る経験の有無

(例) 多くの国籍の人々と生活や様々な活動を共にする体験をした
文化や価値観の違いによる相手との意見の衝突を体験した
国籍を問わず多くの周りの人々を巻き込んで活動を進め、目的を達成する経験をした

・参加青年自身が設定した目標とその達成度合いの評価

事後研修において事業中の目標達成状況について振り返るとともに、必要に応じて今後自らが達成すべき目標を改めて設定する。事業中又は事後研修において設定した目標を達成できたかどうか、また達成の度合いを1年後の時点において調査し、結果を取りまとめる。

・事業後にリーダーシップを発揮することができたか

(例) 仕事や仕事以外の活動において、リーダーシップを発揮した経験があるか。それはどのような場面か。

・事業で培った能力等がその後の活動（仕事、学業やボランティア活動）で活用されているか

(例) 異文化の人々との仕事や活動の協働において、事業参加経験が役立っているか
仕事や仕事以外の活動をする上で、事業参加経験が役立っているか
仕事の選択等のキャリア形成段階において、事業参加経験が役立っているか

・事業をきっかけとして行っている自己啓発の有無

(例) 英語のスキルアップに取り組んでいるか（現在の語学力はどの程度か）
リーダーシップ等を向上させる取組を行っているか
日本の社会や文化等について理解を深める取組を行っているか

②各国との関係強化及び我が国への理解・関心の向上

【自己評価】

・事業から1年後の時点での外国青年や参加国とのつながりに関する状況

(例) 事業で交流した外国青年等と引き続き交流しているか
事業で交流した国の言語、社会、文化等について学んでいるか

③人的ネットワークの構築と社会貢献活動の促進

・事業から1年後の時点での人的ネットワークの状況

(例) 事業で交流した外国青年等と引き続き交流しているか（再掲）
事業で交流した日本青年等と引き続き交流しているか

- ・事業から1年後の時点での社会貢献活動の状況
 (例) 事業後、何らかの事後活動を行ったか。どのような活動か。
 今後、どのような事後活動を行う予定にしているか。

(3) 中長期(5年に1回を目途)で実施する効果測定

①参加青年の成長

- ・事業の成果を社会に還元することができるか
 (例) 仕事やボランティア活動を通じた社会貢献の状況
- ・参加青年自身が設定した目標とその達成度合いの評価
 事後研修等において設定した目標の達成度合いを調査する。
- ・事業後にリーダーシップを発揮することができたか
 (例) 仕事や仕事以外の活動において、リーダーシップを発揮した経験があるか。それはどのような場面か。
- ・事業で培った能力等がその後の活動(仕事、学業やボランティア活動)で活用されているか
 (例) 異文化の人々との仕事や活動の協働において、事業参加経験が役立っているか
 仕事や仕事以外の活動をする上で、事業参加経験が役立っているか
 仕事の選択等のキャリア形成段階において、事業参加経験が役立っているか

②各国との関係強化及び我が国への理解・関心の向上

- ・事業に参加した外国青年等が日本とのつながりを維持しているか
 (例) 事業で交流した日本青年等と引き続き交流しているか
 事業参加後、日本とどのような関わりをもつようになったか(来日経験、日本語・日本文化学習の経験等)
- ・事業に参加した日本青年が参加国とのつながりを維持しているか
 (例) 事業で交流した外国青年等と引き続き交流しているか
 事業参加後、参加国とどのような関わりをもつようになったか

③人的ネットワークの構築と社会貢献活動の促進

- ・過去の事業参加青年の人的ネットワークの状況
 (例) 事業で交流した外国青年等と引き続き交流しているか
 事業で交流した日本青年等と引き続き交流しているか(再掲)

- ・ 事業に参加した外国青年が各国又は国際社会で影響力を持っているか

(例) 過去の事業参加青年の職業や非営利団体での地位

事業のネットワークを活かして開催された行事の規模

- ・ 既参加青年による社会貢献活動の状況

(例) 各国ごとの事後活動のまとめ

④ 既参加青年の社会での活躍に関する定性的評価

- ・ 事業で得たネットワークを活用した社会貢献等の活動についてヒアリング等により経緯、事業との関連性について詳細に把握

Ⅲ. 今後の内閣府青年国際交流事業のあり方に関する意見の整理

本検討会においては、事業の評価や効果測定のあり方を中心的に取り上げて検討を行ったが、それに留まらず事業全体の方向性についても重要な意見が得られた。以下に示したのは、その内容を簡単に整理したものである。

(1) 参加青年の属性について

現在、内閣府青年国際交流事業の日本参加青年の大半は都市部在住の大学生となっている一方、外国からの参加青年は社会人が多く、より多様性に富んでいる。事業の中心であるディスカッションにおいてより広い観点からの意見を喚起するとともに、我が国の多様な面を伝えるという観点から、日本からの参加青年もより多様なバックグラウンドを持つことが望ましい。また、国際交流事業の特徴は互いに刺激し合って成長するところにあり、この観点からも参加青年の多様化は課題である。とりわけ 地方在住者や社会人に対する募集広報の強化 に引き続き取り組む必要がある。そのため、地方の団体や民間企業に対し、所属青年を事業に参加させることでどのようなメリットがあるかという観点からの説明を強化すべきである。

内閣府事業が開始された昭和30年代から社会は大きく変化しており、多くの若い世代にとって海外への旅行や留学は必ずしも困難ではなくなった一方で、近年は国際志向の強い青年と内向きの青年との二極化も指摘されている。現在、我が国の課題となっている地方のグローバル化対応を進めるには、これまであまり海外に関心を抱く機会がなかった 地方の若い世代に、国際的視野を持つとともにリーダーシップや調整力といった能力を身に付けさせ、グローバル人材として地域で活躍してもらう ことが重要である。そうした観点からも、地方在住者に対して本事業への参加を更に促進する必要がある。

(2) 事業において重視すべき能力

次世代グローバルリーダーに必要な能力は「コミュニケーション力」「異文化対応力」「チャレンジ精神」「問題解決能力」「企画力」「マネジメント力」等、様々なものが考えられる。このうち「コミュニケーション力」「異文化対応力」といった他者との関係に関する能力はこれまでの内閣府事業において特に大きな伸びが見られるが、今後もディスカッション中心のプログラムを通じて伸ばしていくべきである。

また「問題解決能力」は我が国の直面する諸課題を解決するために必要とされているが、若い世代には欠けているのではないかと指摘されることが多い。他方、壁にぶつかってもあきらめないためには、自身が何かを達成してきたという「自信」が重要であり、本事業では「自信」「チャレンジ精神」「主体性」といった個人のマインドに関する能力も比較的伸びが大きい傾向にあり、長期かつ密度の濃い研修や交流を通じて参加青年が幾つもの段階を踏んだ成長を経験することで伸びが期待できるものと考えられる。今後も、事業全体を通じて参加青年のマインドに

良い方向の影響を与えることで、「問題解決力」などの実質的な成長の前提を作っていくべきである。

26年度に実施した研修講師によるリーダーシップのセミナーは、アンケートでのコメントや個人報告書から、参加青年のマインドに大きな影響を与えたことが伺われた。今後も、セミナー等の専門的プログラムを通じて「企画力」「マネジメント力」等のより実践的なスキルを伸ばしていくべきである。

(3) プログラムの構成

事業に参加する青年は、日々々のモチベーションが相当程度異なり、事業に期待することや日々々の能力は千差万別である。定型の目標に当てはめるよりは、個々人が自発的な成長目標を持ち、その達成を目指すことが望ましい。このため、事業を実施する側が各プログラムの目的やねらいを参加青年に説明するとともに、研修を受ける参加青年においてもそのプログラムを通じて何を得たいかという自分なりの意図を持って臨むようなプログラムの構成を検討すべきである。

事業期間が過去の事業に比べて短いため、各種プログラムが詰め込まれたスケジュールとなる傾向があり、参加青年は次から次へとプログラムをこなすことで精一杯となりがちである。参加青年の成長を促す観点から、日々の学びを振り返り、統合して、翌日以降に活かしていく時間を組み込めるようにプログラムを構成することが望ましい。また、その振り返りの一環として参加青年同士で互いの成長や課題を確認し合う「ピア・フィードバック」といった自己評価以外の試みを取り入れてはどうか。ただし、「ピア・フィードバック」の実施に当たっては、口頭のみで行う場合も紙面への記入を行う場合も、事前に趣旨や手順の説明や一定のフォーマットを示すといった十分な準備が必要となることに留意すべきである。

また、一定の期間内に青年の成長を一層促進するためには、コース別のディスカッションやリーダーシップ・マネジメントに関するセミナーといった各種プログラムについて、相乗効果が出るようカリキュラムを有機的に結合させることが望ましい。そのためには、各プログラムの関係者（講師、ファシリテーター等）が事前に打ち合わせの機会を持つ等してそれぞれの目標やねらいを共有する必要がある。事業期間中に十分なコミュニケーションをとることも必要である。

事業中のプログラムについては、リーダーシップを高める観点から、より参加青年の自主性を尊重するよう企画するべきである。自主企画・PYセミナー（参加青年が講師となって運営するセミナー）といった青年が企画・運営するプログラムにより多くの時間を割くのみならず、日々々の生活面においても参加青年に運営の一部を任せる試みを取り入れてはどうか。

(4) 事後活動（事業後のフォローアップを含む。）について

自己評価型のアンケートを通じて、参加青年に「自己認識」「社会認識」が形成されるとともに自己実現や社会貢献に対する意欲が高まっていることは観察されたところ。そうした認識や意欲が参加青年の実質的な成長につながるためには、事業中に学んだことを日々の生活の中で実践していくことが重要である。事後活動については事業から1年後あるいは中長期のフォローアップを通じて把握することが想定されるが、その他にも、すでに現在、参加青年は自主的に事業から1年後に再度集まって事業の成果を振り返る機会を設けたり、リーダーシップに関する自主的な研修を実施したりしている。こうした機会を捉えて、参加青年から事業が個々の参加青年及びその周辺に及ぼした影響といったフィードバックを得ることで、事業効果の把握に資することが望ましい。

青年国際交流事業の効果検証に関する検討会 構成員

- | | |
|------------|-----------------------|
| 池上 清子 | 日本大学教授・前国連人口基金東京事務所長 |
| 井上 洋 | 日本経済団体連合会教育・スポーツ推進本部長 |
| 白木 三秀 | 早稲田大学政治経済学術院教授 |
| 竹尾 茂樹 | 明治学院大学国際学部長 |
| 源 由理子 | 明治大学公共政策大学院ガバナンス研究科教授 |
| (座長) 牟田 博光 | 東京工業大学名誉教授 |

【五十音順、敬称略、役職は平成 27 年 5 月 18 日現在】

青年国際交流事業の効果検証に関する検討会 検討経緯

○第1回（平成27年5月27日（水）15:00～17:00）

（主な議題）

- ・事務局からの説明（事業及び評価の概要）
- ・意見交換

○第2回（平成27年6月11日（木）10:00～12:00）

（主な議題）

- ・ヒアリング

平成26年度グローバルユースリーダー育成事業「シップ・フォー・ワールド・ユース・リーダーズ」研修講師 榎本 英剛 氏

- ・事務局からの説明
- ・意見交換

○第3回（平成27年6月18日（木）17:00～19:00）

（主な議題）

- ・事務局からの説明
- ・意見交換